

広重の旅と名所絵④

中山道の旅と 木曾海道六拾九次

江東区深川江戸資料館

1. 広重の画風、作画意識、旅

歌川広重の名所絵は、独特のリアリティと臨場感を感じさせる画風で知られています。しかし、広重の名所絵の多くが実景実写ではなく、名所案内記の挿絵などを種本としたり、自ら写生した絵をもとにしながら、広重独自の創作を加えて作画されていたことがわかっています。広重自身そうした自らの作画意識について「写真」に「筆意」を加えると表現しています。また、広重は生涯に幾度かの旅行を試みていることもわかっており、旅の経験は広重の創作活動に少なからず影響を及ぼしていたと思われます。ここで取り上げる「木曾海道六拾九次」の場合も、広重が中山道その他を旅したときの『スケッチ帖』が残されており、その『スケッチ帖』との関係性が注目されてきました。ここでは「木曾海道六拾九次」について、『スケッチ帖』との関係を示しつつ、中山道の旅が作画に与えた影響を中心に述べます。また、「木曾海道六拾九次」と同じく『スケッチ帖』をもとに描いたとされる『岐蘇名所図会』にも触れ、広重の作画意識や名所絵制作に言及したいと思います。

2. 「木曾海道六拾九次」

「木曾海道六拾九次」は中山道を主題とした名所絵、風景画で、街道絵とも言われます。天保6年(1835)頃から溪斎英泉を絵師として刊行しはじめますが、24図で中断し、その後、広重が引継ぎ、全70景71図が完成しました。二人の絵師による作品というだけでなく版元も複数関わり、その成立事情は大変複雑でまだ明らかになっていない点もあります。「木曾海道六拾九次」は、同じ街道絵で広重の出世作である「東海道五拾三次」に比べると、展示会などで取り上げられることも少なく、マイナーな印象のある作品ですが、風景画の傑作「洗馬」や残存数の希少な「(雨の)中津川」など、いくつかの貴重な絵が含まれていることで知られています。

また、広重の作品の中でも、街道絵には旅人と土地の人との出会いが描かれることがありますが、「木曾海道六拾九次」では特に土地の生活風景を積極的に描写した絵が多いという特徴があげられます。この特徴は、「木曾海道六拾九次」を広重の旅との関わりから見ていく上でも、重要な点になっています。

3. 『スケッチ帖』にみる旅と

広重の名所絵制作

広重の中山道の旅とは、現在、大英博物館に所蔵されている『スケッチ帖』によって明らかにされつつあるものです。『スケッチ帖』は現在までに確認されているのは全4冊。うち1冊は中山道沿いの風景、その他の3冊にも中山道に関する図が混ざっています。

そこに描かれた内容などから、広重は、天保8年(1837)、中山道を通り京・大坂へ向い、その後、備前(現岡山県)を経て丸亀(現香川県丸亀市)まで行き、戻って奈良から伊勢へ行き、東海道の江戸まで帰るといった旅をしたと考えられています。旅の目的はわかりませんが、その後の広重の作品にそのスケッチが活かされていることから、道中の風景を写生し、創作のためのフィールドワークであったと思われる。

広重がこの『スケッチ帖』を手元において活用していたことは確実であるとされており、実際、『スケッチ帖』をもとに制作された名所絵はかなりの数にのぼります。そして、その一つが「木曾海道六拾九次」です。

4. 「木曾海道六拾九次」と

広重の作画

「木曾海道六拾九次」の制作においては、広重のその他の名所絵と同じく、種本をもとにした絵、また自らのスケッチをもとにした絵などが混在しています。ここでは、広重の旅と作画の関わりがテーマですので、「スケッチ帖」を活用、つまりは旅の経験をもとに作画した場合について、二つの作品を例に見てみたいと思います。

(1) 土地の生活者を描く

広重の『スケッチ帖』には、旅中で目にした中山道沿いの土地固有の事物・人物がスケッチされており、広重はそれらのスケッチを「木曾海道六拾九次」のモチーフとして活用しています。ここではその事例として近江の農婦を取り上げます。

「木曾海道六拾九次」の「高宮」には背丈以上の大きな荷物(滋賀県彦根市高宮名産の高宮布といわれている)を背負った2人の女性の姿(図1)が描かれており、その元となったスケッチが『スケッチ帖』に「近江路の人物」



図1 「木曾海道六拾九次之内 高宮」(部分)望月義也氏所蔵(左図)
図2 『スケッチ帖』大英博物館所蔵、菅原真弓氏『浮世絵版画の十九世紀』ブリュックより転載(右図)



図3 「木曾海道六拾九次之内 恵智川」(部分)望月義也氏所蔵(左図)
図4 『スケッチ帖』大英博物館所蔵、菅原真弓氏『浮世絵版画の十九世紀』ブリュックより転載(右図)

という題とともに描かれています(図2)。また、「恵智川」には牛を引く女性(図3)が描かれており、これも『スケッチ帖』ほぼ同図のスケッチが残っています(図4)。

普段江戸で暮らす広重にとって、近江の女性の姿は土地をあらわすものとして深く印象付けられたものと思われる。これらは、広重が旅先での見聞を活かして作画した事例として興味深く、土地の生活風景が多いという「木曾街道六拾九次」の特徴の一つになっています。

(2) 二つの「落合」

『スケッチ帖』には、^{みの}濃国の「落合」(現岐阜県恵那市落合)を描いたスケッチが残されています。そして、そのスケッチをもとに描いたとされる広重の作品に、『岐蘇名所図会』の「落合」(図5)と「木曾海道六拾九次」(図6)の「落合」があります。以下、同じスケッチをもとに描かれた二つの作品を比べることにより、広重の名所絵

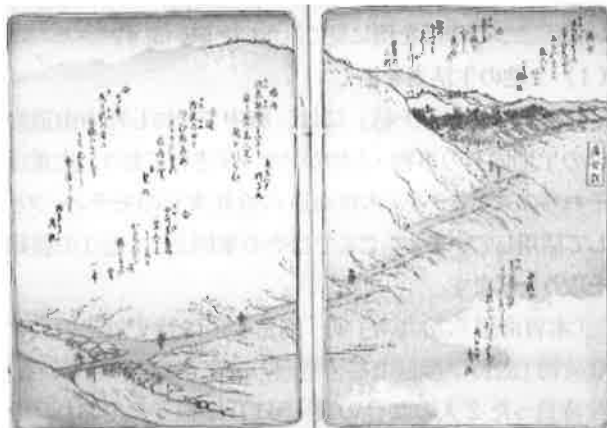


図5 『岐蘇名所図会』早稲田大学図書館所蔵

制作における創作性、「木曾海道六拾九次」らしい改変を探ってみたいと思います。

『岐蘇名所図会』と「木曾海道六拾九次」はスケッチをもとにほぼ同じ構図で描かれていますが、同じ構図であっても、絵のタッチや色合いなど全体的な^{ふんいき}雰囲気は異なっています。『岐蘇名所図会』は、^{きょうかほん}狂歌本であるため狂歌が絵中に配置され、それらの狂歌が絵の一部として自然に溶け込むように描かれているのが特徴的です。一方の「木曾海道六拾九次」では、周辺の山々も丹念に彩色され、街道には広重の作品にたびたび描かれる大名行列の姿があります。大名行列は中山道を象徴する風物とも言え、街道が主題の「木曾海道六拾九次」を描くには大切な要素であったとも考えられます。また大名行列を描き込むことで、中山道の風景をリアルに感じることの出来る作品になっているとも言えます。

「落合」のスケッチ、それをもとに描いた『岐蘇名所図会』と「木曾海道六拾九次」との比較から、広重が単に実景実写をそのまま作画していたのではなく、改変を加えて創作していたことがわかります。

5. 旅の経験と作画

広重の旅の経験が「木曾街道六拾九次」の作画においていかに活かされているのかについて見てきました。

広重は、旅中で興味関心を持った事物、感動したこと、作品のテーマになることを『スケッチ帖』にしたためたことでしょう。旅の経験は、広重のセンスを磨き、創作のヒントとなり、作画の過程で活かされていました。広重も、実際に現地に赴いて見聞したからこそ描ける事物を描き込むことで、様々な効果を狙ったはずですが、また、実景を活かす場合でも、広重は作品に応じて様々な改変をしていました。

旅の見聞を活かした作品の絵画的な評価は必ずしも高いとは限りません。それでも、広重の「写真」に「筆意」を加えるという作画姿勢と広重の独自の画風を生み出すために、旅が一助となっていたと思われます。



図6 「木曾海道六拾九次之内 落合」望月義也氏所蔵